

広島市の療育センターの特徴は、入園1年目が親子通園、そして毎日通園であることですか。この2つのことは、初期のていねいな療育を必要とする親子にとってとても大切なことだと思っています。しかし、就労家庭の増加や保護者が直接事業所と結ぶ利用契約制度に大きく影響を受け、時代遅れという見方がされているのが現状です。

親子通園の意義

親子通園は子どもにとっては、保護者との信頼感を育んでいくこと。保護者にとっては、わが子の理解を深めた上で関わり、仲間づくりをしながら前向きに子育てをしていく力がつくこと、将来への見通しをもち、家族の絆を強めながら子育てしていくことにつながっています。

保護者自身が、家事やきょうだいの子育ても抱えての生活に不安をもちながらも乗り越えて決断される場合、あるいは「わが子のことがわかりたい」「親子通園だからこそ選んだ」と言われる場合など、入園までの気持ちの揺れや葛藤は本当にさまざまです。そこを受けとめながら、それぞれのご家族の歩みを大切にしたいと思います。

4月、ドキドキの入園式を終え、日々の療

喜んでくれる仲間ができ、わが子の成長にさらに手応えがもてるようになります。

親子通園は「一生の宝物」

「あの親子通園時代は大変だったけど楽しめた、あの時代があつたからこそ今が楽しいんだと思う」というたくさんの保護者の声に支えられてきました。親子通園で向き合ったこと、学んだこと、感じたこと、ともに歩んだ仲間の存在は、わが子を愛おしく思いながら育てられる土壤になり、それがわが子の将来を支える大きな力にもなり、社会を変えていくエネルギーにもなっていきます。

〈現在特別支援学校1年生男児のお母さんのメッセージ〉

わが子は、未熟児だったこともあり発達が遅っていました。「さつと少し遅れているだけ、いつか追いつくはず」と思う半面、やはり何かが普通の子どもたちがう、と漠然とした不安を抱いていました。障害名もわからなまま、障害に関する情報を得ては一喜一憂する日々でした。今の子どもの発達に対してどう判断したらいいのか、親として何をしてあげられるのか悩みましたが、悶々とした気持ちを抱えているよりも、専門的な機関で診てもらつた方が親子双方にいいと思い、北部こども療育センターわかば園に入園しまし



運動会ごっこ～お母さんと一緒に作った「ももんちゃんパンツ」に乗って

仲間がいっぱい ひろしまの療育

この連載では、全障研広島県支部広島乳幼児サークルのメンバーが、乳幼児期の療育で大切にしてきたこと、保護者とともに運動してきたことなど、ひろしまの療育についてお伝えします。



第11回 守りたい親子通園・毎日通園

広島市北部こども療育センター 佐々木里美

育がスタートします。集団の中で走り回る、部屋に入らない！と抵抗する、家庭と園では姿がちがうなど、子どもの姿はそれぞれですが、知っているようで深くは知らないなかつたわが子の一面が表れます。わが子が見せる姿の裏側でどんなしつこさを抱えているのか、わが子のありのままの姿を受けとめる作業がまずは必要です。また、そのためには園での生活や遊びの中でも、子どもが能動的に活動する場面の姿に寄り添う意義は大きいと思います。

1学期のまとめ懇談では、「親子通園がなければ路頭に迷つていました」「イライラしなくなったり、入園前は追い込まれているような気がしていた」など子育ての苦しさを一人で抱えがちであったことが解消されてきた様子が伺えます。「わが子のことを一緒に考えてくれるなんてうれしい」と言ったお母さん。家庭での生活も含め、一緒に考えて支えてくれる職員の存在も心強いです。「不安ばかりだつたけど、保護者同士で話すと一人じやなないと感じられた」肉体的な疲労や気持ちの負荷はかかりますが、日に日に子どもが変化していくことを目の当たりにし、それをともに

た。上の子と同じ幼稚園に通わせたい思いもありましたが、子どもが心から楽しめ、自然と笑顔になれる場所の方が本人の発達にいい影響があると思い、心を決めました。

入園後は、発達に偏りのあるわが子でもわかりやすい生活環境であること、また、ありのままの姿を肯定的に受け入れてもらうことが子どもの心の安定や充足感につながつたようで、日に日に好奇心を広げ、表情が豊かになつていきました。また、大勢の中の一人として取り残されることなく、発達の遅いわが子でも手応えを感じられるようなりくみを毎日繰り返すなかで、受け身だった姿から次第に自分で目的をもつて向かう、好きだから手を伸ばすというような能動的な姿に移り変わつていきました。親自身も、先生方の子どもに対する声かけや接し方に子育てのヒントを得たり、発達の研修などを通して子どもや将来に対して「わからないことからくる漠然とした不安」が軽減されました。

また、「障害や特性があつても、わが子なりのペースで成長する」と実感したことなどでもの力を信じられるようになり、育児に対して少し前向きになることができました。そしてなにより、頑張る子どもたち一人ひとりの姿を間近で見たり、同じような悩みを共有できる母親たちと話すことで、親として障害